

円珠庵・妙法寺

文 嶽 恭 子

カメラ 藤 岡 充 子

円珠庵は、契沖在世の時のまゝの形で史跡として保存されていたが、昭和二十年（一九四五）の戦爆で焼失し、礎石と基石が残っていたのを、戦後、大阪女子大学々長平林治徳氏を理事長とする、契沖阿闍梨顕彰会——契沖阿闍梨の業績を顕彰し

学問尊重自由討究の遺風を昂揚することを目的とする——が、昭和二十七年（一九五二）組織され、平林学長から依嘱をうけた角尾篤彦氏が設計をし、昭和三十年（一九五五）三月竣工し、円珠庵は復興したのである。その後、大阪の各大学の国文学の先生方の会である大阪国文談話会

が、その復興された円珠庵を会場として「円珠庵土曜講座」を開始し、日本文学の講座が開かれて、こんにちに至っている。

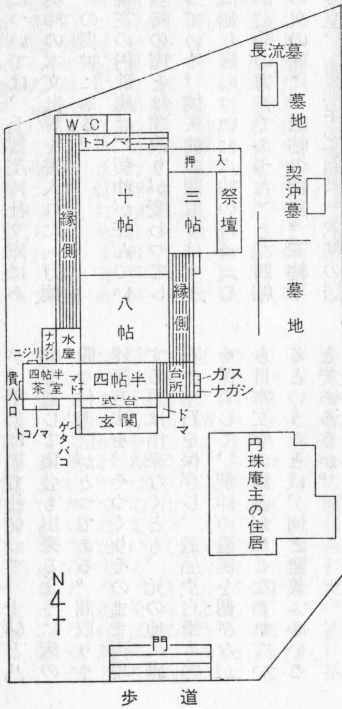
円珠庵の所在地は、大阪市天王寺区餌差町二八番地（現在住職喜多海賢師）にあり、いまでは車の往来が激しい街のなかであるが、ここで契沖は、元禄三年（一六九〇）五十一才の時から、元禄十四年（一七〇一）六十二才で没するまで過ごしたのであった。久松潜一博士の『契沖』に従って、いまその伝記のあらましをふりかえってみよう。

寛永十七年（一六四〇）、加藤清

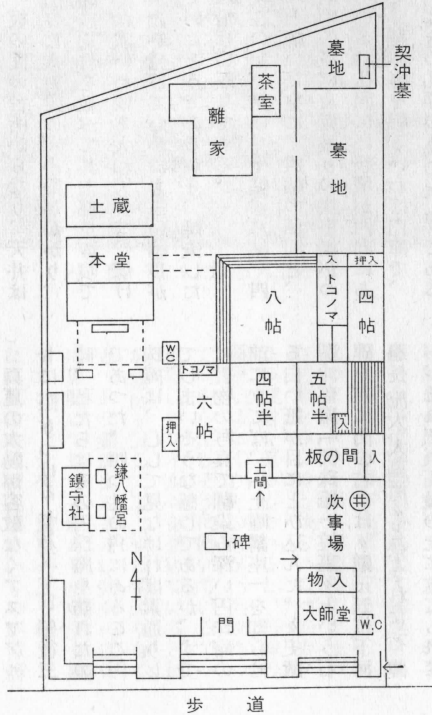
正に仕えた高禄の士を祖父（下川之宣）、伯父（下川元真）にもつ武家の子として生まれた契沖は、幼くして主家改易にあい、家庭の不如意も原因して、慶安三年（一六五〇）十一才で出家し妙法寺に入り、手定を師として十三才までを過ごした後、高野山で修業をし、寛文二年（一六六二）二十三才にして大阪生玉の曼陀羅院の住職となった。しかしその煩雑な生活に堪えかねて寺を脱れ、山村の草庵に静かに和漢の典籍を読みつゝ十年を過ごし、再び延宝六年（一六七八）三十九才で、妙法寺の住職となった。人間的に成長した契沖は、その煩雑な生活のうちで古典の注釈を続け、その研究に没頭して大著を完成している。そして契沖五十一才の、元禄三年（一六九〇）一月、母の死を機に妙法寺住職を如海にゆずつて、円珠庵に隠棲する事になった。生活は苦しかったが、俗務に煩わされることなく、元禄十四年

(一七〇一) 正月二十五日六十二才にして没するまでの約十年間を著述時代として過ごしたのであった。
 円珠庵時代の業績を考える時、まずあげられるのは、『和字正濫抄』である。これは万葉研究の結果として得た仮名遣観であつて、歴史的仮名遣の事実を知るに至りこれを主張し実証したものであり、仮名遣研究史上大きな意義を有する。これは契沖の著書のうちで署名して生前に刊行した唯一のもので、大いなる自信をもつて世に問うたのであろう。しかしこれに対しては多くの反響があり、殊に橘成員の『倭字古今通例全書』が契沖説に反対をしたので、それに反駁する意味で書いたのが『和字正濫通妨抄』である。こうして歴史的仮名遣は契沖に至つて確立せしめられた。種々の反対論を破つてこれは学界に君臨せしめられたのである。同時にこの期には、注釈書として『百人一首改観抄』『古今余材

現在の円珠庵見取り図概略



焼失前の円珠庵見取り図概略



抄』「勢語臆断」（記紀歌謡の注釈書）「ものあはれ」論の立場から批評して注目される源氏物語注釈の「源注拾遺」等がある。また、本文

校訂と書入れとしては『かげろふ日記』「堤中納言物語」があり、後日それぞれがすぐれた日記文学と短編小説として認められたことをみても、そこに契沖のすぐれた眼識をみることが出来る。その他書写校合した古典は極めて多く、随筆には、古典籍を書写校合した際の備忘録といふべき性質の「河社」「円珠庵雑記」「円珠庵雑々記」がある。こうした著述以外に契沖は、元禄九年（一六九六）五十七才の五月十二日より同年九月十八日まで、今井似閑、海北若冲らにすすめられて、円珠庵において万葉集講義をおこなっている。その際、和泉の伏屋重賢に書面を送つて、その講義の聴講をすすめ、万葉研究においては才一人者との自信を示している。この時の講

義については、上賀茂神社文庫にある契沖の本文批評を書入れた「万葉集」の奥書にある。

現在の円珠庵は、契沖が住んでいた当時の庵とは間取りが變つてしまつている。焼失前の間取りは、主屋は廻り縁のついた八帖の書斎（これが契沖の書斎であつた）と、四帖半の次の間に、四帖の納戸、五帖半の寢室、四帖半の玄關、六帖の居間、板の間の台所からなり、天井は露出した太い梁に、小梁がかかり、其間に割竹を並べて其上部を漆喰で塗つた、いわゆる大和天井で、煤けて黒光を発していかに古い感じが出ていたそうであるから、焼失したのは惜しい限りである。

現在の記念館は、十帖、八帖、四帖半と続いた室に、四帖の仏間と、四帖半の茶席及板張りの炊事場がついてゐる。仏間には祭壇が西向にあつて、契沖等を祀るいわば内陣である。十帖はその礼拝の爲の外陣である

が、平素は襖で仕切つて、十帖と八帖を通して集会も出来るように床の間や付書院がとつてある。間取りや建築方法を、そつくりそのまま再現する事は出来なくとも、元の地に礎石や墓石を保存し、遺品や自筆本等を保管して、契沖の遺徳を偲びながら日本文学の講義がおこなわれているといふことは、何と意義ふかいことであらうか。

真夏の太陽が容赦なくアスファルトに照りつける七月三十日午後三時、私たちはその円珠庵を訪れたのであつた。四つ辻の角にあるここ円珠庵は、心して見なければ素通りしてしまふような感じであるが、すでに書物の写真で馴染み深い円珠庵の前に立てば、「土曜講座」を知らせる白い紙が目にとび込んだ。ク史蹟契沖舊庵「圓珠庵」竝墓々という石碑を左に門の右にはク贈正五位下河邊長流大人墓所々と示された石碑が、それぞれ石段の上に立てられて

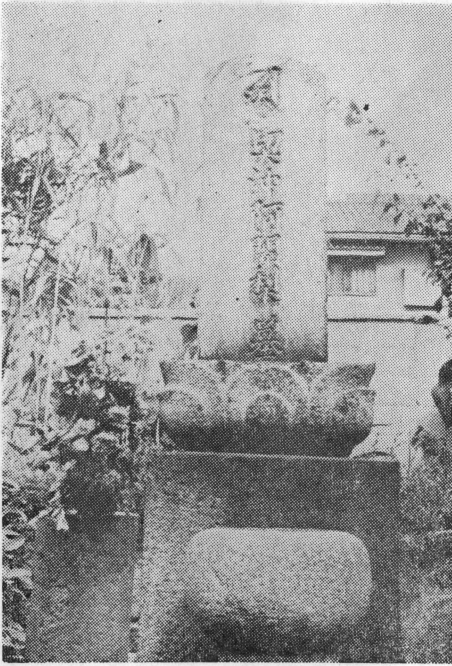
ある。門をくぐると目の前に円珠庵記念館がある。土曜講座はすでに始まつていた。しばらく、美しく手入れされた庭を見てみると、朝顔の古代紫の色に元禄時代が偲ばれた。記念館わきのひっそりとした家の中に声をかけてみる……。落ちついた様子で親切に説明して下さる声に、暑さを忘れ、不知不識緊張した。教わつたように記念館の横を通りぬける



円珠庵（大阪市天王寺区）

と、つき当たりに今聞いたばかりの下河辺長流の墓石が見えた。説明によれば、この石碑はもと今里の妙法寺にほど近い某の川端の墓地にあつたのだが、水害に荒らされたため、生前最も縁の深かつた契沖のお墓がある円珠庵へと移されたそうである。石碑には大きなひび割れや応急処置を施したような跡が見られ、すでに文字は読みづらくなつていた。

しかしそば近くよつてみると、確かに○○位下○邊長流大人碑とまでは読みとる事が出来る。うれしくなつてカメラを出す。閑伽にたまつた枯葉をちよつとはらいのけてカメラの位置を確かめっていると、石碑の周囲ではたくさんの蟻が行列を作つて何やら忙しそうに働いている。一枚写してフィルムをまいていると何か目に入つたので思わずふりむくと、トラ猫がまんまるい瞳を一ぱいに見開いてじつと私たちの様子を窺っている。元来、猫はあまり好きでない私には、瞬間冷たいものが背筋を走つたように感じられた。追い払うことも何となく気味悪く、かといつて睨み合つていても一層不気味なので目をそらすと、今までじつとしていた猫は、二、三步飛ぶようにして歩きまた立ち止つてしきりにこちらの所作をみつめている。そばにこないことがわかつたので今度は落ちついて猫に笑いかけてみた。なぜなら内心、「ひよつとするとこの猫……この石碑と関係があるのかもしれない



円珠庵 契沖阿闍梨の墓

ない……」と思つたからである。するとちよつと楽しくなつて、向うが根気負けをして姿を隠すまで百面相をしてその挙動を追つていた。長流大人の碑から三メートルばかり離れた所に契沖阿闍梨の墓がある。花たての花は枯れて碑の後は夏草が茂つたままであつたが、契沖の墓石は土曜講座の様子をみつめながらうれしそうにならずにいる風にみえた。

近代的なブロック塀の外は行きかう車の騒音、排気ガス、埃で白くなつた街路樹の葉等であるが、塀一つ隔てたここ円珠庵内の墓地には世俗を離れた寂寥感が漂つていた。

次いで、私たちは妙法寺を訪れた。妙法寺は、契沖が慶安三年（一六五〇）十一才の時出家をして、当時の妙法寺任職であつた手定を師として十三才までを過ごした寺であ

り、又後再び延宝七年（一六七九）四十才で、この寺の住職として戻り、円珠庵に移るまでの、約十年間を過ごした寺なのである。妙法寺に現在も伝わっている「妙法寺記」によると、この寺は聖徳太子建立といわれている古寺で、近世になつてからは正円、祐恵、手定と継いで、手定の次に契沖が住持となつた。そしてこの時代に契沖は、今までの長い学問修業を終えて身につけた和漢書及び仏典の深い知識を傾けて著述に専念している。契沖を永遠に伝えるべき著書であるところの「万葉代匠記」の初稿本と精選本とはこの期に書きあげているのである。この時代には四、五の小著をも書きあげている。その点ではこの妙法寺時代は、契沖の著述時代第一期ともいえるのである。「万葉代匠記」は、契沖が徳川光圀の委嘱援助で、曼陀羅院時代に得た親友下河辺長流に代わつて書き上げたものであり、それまでに蓄えてきた古典の深い造詣を万葉集の注釈によつて思うままに書き表わ

そうという情熱があつたのであろう。天和三年（一六八三）四十四才頃起稿し、元禄三年（一六九〇）五十一才で「万葉代匠記精選本」を書きあげた。代匠記は契沖の学問を代表するもので、この業績は万葉研究史の上でも一時期を画することになった。注釈の特色は、文献学的、実証的であり近世国学の先駆となり得たのである。

久松潜一博士の前掲の著によれば、「私も大正の末にこの寺を訪れたことがあるが、閑静な土地にあり、それほど広い地域ではない、この寺に「妙法寺古図」とあるのを見たが、妙法寺の図面があり……」と書かれてある。現在妙法寺の地名は、大阪市東成区大今里本町三丁目一二五番地であり、やはり賑やかな街のなかにある。そう大きくはない平凡な寺としての外観を有している。現在の妙法寺の建物は、本堂、庫裡とも契沖在世当時のものではない。ここで妙法寺の沿革については、話を聞くと、「戦国時代以前には、

現在の妙法寺がある地点を中心としてかなり広範囲に十二の坊があつた。ところが織田信長が石山本願寺を攻略した際に、大阪にある寺は焼かれ、この十二坊も焼失した。がその一つ、角ノ坊かくのぼうという坊のみが焼け残り、それが妙法寺と名づけられ契沖阿闍梨はその妙法寺に住んだのであつた。しかし契沖が住んでいた頃には寺はもうかなり荒廢していた。そして契沖の没後享保六年（一七二一）に現在の本堂が建てられたのである。庫裡は昭和八年（一九三三）に、御堂筋にあつた寺が強制立退きにありその庫裡を現在の地に移したのである。よつて現在の妙法寺は、契沖没後場所はほぼ同じではあるが、全く新しく生まれかわつた寺といえよう——ひやつとするうすぐらい庫裡の中で御任職は淡淡として語つて下さつた。本堂の前に立つと、契沖在世当時の面影はないのだとわかつていても、どこかなつかしい気持がした。その前にある大樹は枝を張り、西日を受けた葉が白く輝

いていた。本堂わきの木陰に、々契沖阿闍梨之墓々と書かれた供養塔があり、それに並んで、丰定、母、兄の墓が静かに立つていた。円珠庵では今なお契沖ゆかりの国文学講座が開かれ、少なくとも訪れる人もあるであろうのに比べて、この妙法寺には、近所の二、三人の子供と蟬の声ばかりであつた。かなり前までは門前に契沖についての事を記した立て札が立てられてあつたそうであるが、もうそれもなく庫裡へと続く道の片側がガレージになつているのも時代の相であり、それも別段におかしくも何ともない事であつた。白い砂が目にいたいような午後境内には何も想像出来なかつた。何だか後髪をひかれる思いで、忘れ去られたようなこの寺を出た。

時代の流れとそれにいつのまにか流されていく人間の営みを思いながら、そうした外観の変遷とは別に、いまも生きている契沖の偉大な業績について、私は改めて考えていた。